

## 小児科

### ■GIO :

将来の専門にかかわらず、臨床医師として役に立つ小児医療全般にわたる基本的診療態度・診療知識・診療技術を習得し、患者・家族から信頼される望ましい医師素養のひとつとする。

### ■SBOs :

1. 小児や家族と良好な医師・患者関係を築き、小児の病気のみを診るのではなく、家庭環境などにも配慮しながら、小児患者も人として尊重、全人的に診療する。
2. 小児の正常な発育発達・検査値などを理解し、それぞれの発育段階にある小児に対して適切な評価ができる。
3. 小児を不安がらせたり、泣かせたりしないよう配慮した小児科の診療方法・技量を身につける。
4. 四肢も含めた全身の診察を行い、患者の全身状態を判断、トリアージできる能力を身につける。
5. 新生児・乳幼児・小児に対する初期救急蘇生ができる。
6. 小児科外来では救急も含め、一般的なトリアージの原則にしたがって行動、重篤な状態には速やかに対応する。
7. 小児に特有な心身病態生理を理解し、的確に対処する。
8. 小児のプライマリケアに関する一般的知識を持ち、患者家族に適切な指示・指導をする。
9. 小児期一般感染症に関する知識を持ち、患者家族に適切な指示・指導をする。
10. 乳幼児健診・予防接種などに関する一般的知識を持ち、患者家族に適切な指示・指導をする。
11. 単独または指導医のもとで、小児の採血・皮下注射をする。
12. 指導医のもとで新生児・乳幼児の採血・皮下注射をする。
13. 指導医のもとで小児の腰椎穿刺を実施、髄液検査の的確な評価ができる。
14. 指導医のもとで的確な検査指示を出し、またその評価が正しくできる。必要な場合には専門医にも直ちにコンサルトする。
15. 指導医のもとで検査に必要な鎮静法を適切に選択、安全に行うことができる。
16. 単純レントゲン写真の読影が正しくできる。
17. 指導医のもとでCT・MRI検査の指示を出し、その評価が正しくできる。必要な場合には直ちに専門家にもコンサルトできる。
18. 多数例の経験により小児の基本的な診察法、検査法、処置、治療法を習得する。
19. 小児の体重（体表面積）当たりの薬用量を理解し、一般的薬剤の指示・処方箋の作成ができる。
20. 薬剤の剤型や外観・味・色に対する知識を持ち、服用コンプライアンスにも配慮して、小児に最も適した処方を行い、患者・家族や看護師に指示説明できる。
21. 輸液の適応を的確に判断し、その病態や体格に応じた輸液の種類、初期投与速度、維持量などの輸液スケジュールを正しく作成実施できる。
22. 脱水の重症度を判断でき、適切な処置がとれる。
23. けいれん児の身体所見をとり、必要な検査の判断や応急処置をとることができる。
24. 腸重積や虫垂炎・精索捻転などを含む小児急性腹症の判断を行い、外科・泌尿器科などにコンサルトができる。
25. 小児科一般診療や小児救急の現状を理解し、研修医としてこれらの診療に積極的に参加する。
26. 小児救急では重篤な疾患を識別する能力を養い、問題解決のための素養とする。

### ■LS :

1. 病棟・外来での“On the job training (OJT)”が中心になる。
2. 主治医の指導の下で副主治医として患者の診療に当たる。
3. 週2回の小児科カンファレンスに参加し、受け持ち患者のプレゼンテーションを行い、その他の患者の臨床所見、検査、診断、治療などの討議にも加わる。また病院で行われる各種カンファレンスにも参加する。
4. 普段より、眼、耳、鼻を含めた頭頸部、胸部、腹部、鼠径陰部、四肢など全身の診察を行い、

患者の全身状態の把握とともに、些細ではあるが、重要な局所の所見も見逃すことのないような診療を習慣化する。

5. 病棟では最低 4-5 名の入院患者を担当し、また採血や血管確保など日々の病棟処置にも積極的に参加する。
6. 必要に応じて、放射線科などとの共同カンファレンスで、画像診断技術の向上を図る。
7. 患者病態により、総合病院にある臓器専門診療科(耳鼻科、皮膚科、眼科、外科、呼吸器外科、神経内科、消化器科、循環器・不整脈科など)とのカンファレンスに参加する。
8. 経験した患者や症状・疾患について、レポートを作成する。

【週間予定表】

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
午前	外来	外来、回診	外来	外来	回診、外来	外来
午後	育児相談、乳児検診	症例検討、アレルギー外来、小児神経外来	小児循環器外来	予防接種	症例検討、回診、小児喘息外来	回診
夜診	外来	外来	外来	外来	外来	

■Ev :

1. 自己評価：EPOC の入力を通して、不十分な分野等のチェックや、総合的評価を行う。
2. 指導医による評価：EPOC をチェックして、未履修な分野や弱点のチェックを行い、また総合的評価も行う。
3. 看護部、コメディカル等による 360° 評価：病院独自の研修医評価表を用いて評価する。
4. OJT 中も、態度、知識、診断、処置など、適宜指導・評価を受ける。
5. 各種カンファレンス中も、臨床所見・検査所見・画像所見、診断、治療方針等について、適宜指導、評価を行う。
6. レポートについても、同様に、作成の過程から適宜指導・評価を行う。